



10
月

パストラル尼崎

神
無
月

No.136.2023(R5)年9月25日

〔編集・発行〕

パストラル尼崎

尼崎市潮江1丁目10-2

Tel.06-6493-0521

Fax.06-6493-0301

発行責任者：峰田 康弘

◆10月の歳時記◆

『麻酔の日』〜華岡青洲の妻〜

今からおよそ二百年前の十月十三日、江戸時代の日本で、世界初の「全身麻酔」による乳癌摘出手術が成功しました。その偉業を成し遂げたのは紀州の医師「華岡青洲」

麻酔のない時代、手術は激烈な痛みとの戦いでした。西洋での成功例は、青洲の成功から四十年後のアメリカのモートンのエーテルを使った全身麻酔下の手術だった事から、青洲の成功はまさに「世界初」の偉業でした。この成功を記念し、日本麻酔科学会が十月十三日を「麻酔の日」と制定しています。

妻や母の協力と、真摯な医療への姿勢で取り組んだ青洲の人生は、有吉佐和子著の「華岡青洲の妻」に描かれ、何度も映像化されています。そこには、青洲が創る麻酔薬「通仙散」を完成させる為に自ら人体実験に身を捧げた、武家出身の妻（加恵）と医師一家を支えてきた母（おつぐ）の、美談の裏に繰りひろげられたドロドロした女の確執を描いています。それが、それ以前にも彼を支え続けた妹たちの存在もありました。

二十二歳の時、医学の勉強のために京に行くことを望んだ青洲ですが、子だくさんの華岡家にそんな余裕はありません。それを聞いた妹の於勝（おかつ）と小陸（こりく）は、自分たちが機織りをしてお金を作るからと父を説得したと言われています。於勝は結婚する事なく青洲のために機を織り続け、三十一歳で乳がんを患いこの世を去っています。

青洲はその後、様々な動物実験を経て、「通仙散」はヒトによる臨床実験（おそらく曼陀羅華の臨床用量を決める為の試験）が必須の段階に入りました。その気持ちを察した「おつぐ」と「加恵」は、競う様に実験台になろうとします。悩んだ青洲ですが、意思の固い二人に押され通仙散の臨床試験を実施。小説では、高齢の母には「通仙散」が殆ど含まれない睡眠薬を。妻には「通仙散」を服用させます。結果、妻の加恵は視力を失う事になるのですが・・・（これはアトロピンの有害作用によるものと容易に推測されるそうです）

小説や映像の中で、青洲の偉業は、彼を巡る母と妻の確執があまりにも強烈に描かれ、何十年もかけ偉業を成し遂げた青洲の存在が薄いものとなった感がありますが、世界初となる麻酔薬「通仙散」が完成したのは、これだけ女性に愛された青洲の人となりの上に、成し得たものだったかもしれません。肖像画を拝見するに、内面がことのほか素晴らしかったのでしょうか・・・失礼しました。汗



華岡青洲

「原木椎茸」vs「菌床椎茸」

最近、実家に戻り農業を始めた友人から、農作物に関する様々な事を学び、実際に畑で収穫体験したりとあらためて野菜の美味しさに目覚めている今日この頃ですが、先日、その友人から「原木椎茸」と「菌床椎茸」の違いと、塩だけでも断然美味しい「原木椎茸」の素晴らしさを熱弁され、そうなのか？と調べてみると、スーパーの店頭で並んでいるのは、その殆どが「菌床椎茸」のようで、どうりでそんなに焼き椎茸が「美味しい」と感じた事がなかったはずと納得！ おがくずブロックの中で育ち、季節関係なく3カ月ほどで収穫できる「菌床椎茸」とは違い、「原木椎茸」は収穫まで2年もかかり、春と秋しか収穫できない上、手間ひまかかる重労働。先の友人も「家用に作ろうかと思うけど・・・」と悩んでる様子。

“山のアワビ”と称される「原木椎茸」農家直伝の最高にウマイ椎茸の食べ方は、①洗わない ②裏面から焼き白い部分が黄色になったらそっと裏返す ③それ以上は返さず、さっと火を通すだけ ④塩か醤油でシンプルに頂く その味は、口の中で旨みがジュワ〜と広がり鼻から香りが抜けていくのだからか、特にもぎたて完熟の肉厚椎茸は最高らしいですよ！

令和5年度

パストラルシニア大学

今年度も多彩な講師をお迎えし、充実した内容でお届けしています。講師陣からその受講姿勢を絶賛されていた皆さま。今年も皆勤賞めざし頑張りましょう。

* 毎回フロントにお申込み下さい(席に限りがあります)

* 当日は、学生証も忘れずに！

第5回

「司馬遼太郎」

・日時：10月13日(金) 14時～15時

・場所：多目的ホール

・講師：元、産経新聞編集局次長

石野 伸子 氏

「竜馬がゆく」「国盗り物語」「街道をゆく」など多くの名作を残した司馬遼太郎の生誕100年となる今年、後輩にあたる石野伸子氏を迎え、その人柄や歴史観などについてご講演頂きます。